

第12章

3歳以上児の保育と 指導案の作成

1 3歳以上児の指導実習

1.1 皆で一緒に行う活動の捉え方

10

ここでは、3歳以上児のクラスでの全日または部分指導実習について確認していきます。特に3歳以上児のクラスで指導案を立てて実践するとき、子どもたち全員が集まって、実習生が前に立ち活動を展開する時間を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。しかし、このような時間が指導実習の学びの中心だと考えてしまうことは、次の2つの観点から注意が必要です。

1つには、保育の中心は、子どもの自発的な活動としての遊びであるということです。子どもが自ら環境に関わって、多様な体験を積み重ねていくことです。大人が提案し一斉に展開する活動ではありません。皆で集まって行う活動は、自発的な遊びを豊かにするために行うものであることを理解しておきましょう。

20

2つには、保育所では3歳頃にはクラス全体が集まって活動することが可能になるということです。これは、他児への関心が高まって直接的な関わりが増える発達の時期であり、それまでの保育所での生活経験から子ども同士と一緒に遊ぶ楽しさを知り、また保育士が提案したり伝えたりすることへの期待感をもつようになっているからです。その意味で、皆で一緒に行う活動は楽しく、大切です。しかし、一斉に集まって活動すること自体が目的ではないのだということを理解しておきましょう。

そうはいつても、皆さんにとって入念な準備を必要とし、緊張も伴う活動は、やはり子どもの前に立って展開する一斉での活動ということになるでしょう。また、一日の流れのなかで、3歳以上児のクラスで、集まりなどの時間がないということはほとんどありません。

30

以上にあげたことを理解したうえで、指導案作成、準備、実践、振り返りを行っていきましょう。

1.2 「子どもたち」ではなく「この子たち」であること

第10章の「6 実習日誌から実習指導案へ」で述べたように、指導案は実習日誌を基に作成します。つまり、一般的な「子どもたち」ではなく、皆さんがすでに出会い関わり合っている「この子たち」の興味や関心、特徴、日頃の姿から予想して計画するのです。そのため、どのような指導案がふさわしいかは、皆さんでないとわかりません。言い換えれば、皆さんなら「この子たちが好きなこと」「この子たちの絵本を聞く様子」などを思い浮かべられることでしょう。「この子たち」の実態を日誌で確認しながら立案していきます。

2 指導案作成の方法 | 一部分実習指導案

では、具体的に実習日誌の例（p.137の日誌例）を参照しながら、部分実習指導案を作成してみましょう。この章を読んでいる皆さんはまだ実習前ですので、実際の子どもたちの姿を基にすることはできませんが、立案の過程と、留意したいポイントについて確認していきます。部分的な指導実習ではありますが、子どもにとっては連続した一日の生活の一部だということをしっかりと意識してください。

2.1 部分実習を行う時間帯の確認

部分実習を行う時間帯（朝の会、昼食前、午睡前など）を担当保育士等と確認します。日頃、その時間帯にはどのような活動をしているのか、前後の子どもの動きはどのようなものかといった点を考慮して、部分実習の構想をします。

部分実習を行う時間帯の活動を、実習日誌（p.137）から読み取りましょう。

2.2 子どもの姿

日誌から子どもの日頃の姿が読み取れるはずですが、子どもの姿から子どもたちに合った内容を考えることとなります。よって、この欄が、その後立案する「ねらい」「主な内容」の前提となります。言い換えれば、「子どもの姿」の欄は、なぜこのような「ねらい」が設定され、「主な内容」を考えたかがわかるように書かれる必要があるということです。

部分実習の場合には、2.1で確認した時間帯の活動との関連を中心に、子どもの姿を捉えます。つまり、朝の会を担うのであれば、子どもが一日の見通しを

もつ様子や、クラスの子どもたち同士の関係などの状況を捉える必要があるでしょう。午睡前の絵本の読み聞かせであれば、子どもの興味・関心や絵本に親しむ様子はどうか、皆で集まるときの様子はどうかといった姿を読み取ることが考えられます。以下に例示したような視点から捉えていくとよいでしょう。

・クラスで多く見られる遊び、興味や関心に関する視点

→空き箱や段ボールなどで、よくお化け屋敷ごっこをしている。お化けが出てくるところを工夫しながら考えて作っている。

→虫や木の実などの自然に関心を持ち、園庭の石やプランターの陰にいそうな虫を探している。見つけると友達と見せ合う様子が多く見られる。

・保育士や子ども同士の関わりの様子に関する視点

→それぞれ一人でじっくり取り組んでいる子どもが多い。

→意見がぶつかり合うこともあるが、自分たちで解決している様子がある。

→何かを見つけたとき、何かができたとときなど、保育士に見てもらうことを喜んでいる。

・生活習慣への取り組みの様子に関する視点

→身の回りのことに、自分から取り組んでいる子どもが多い。

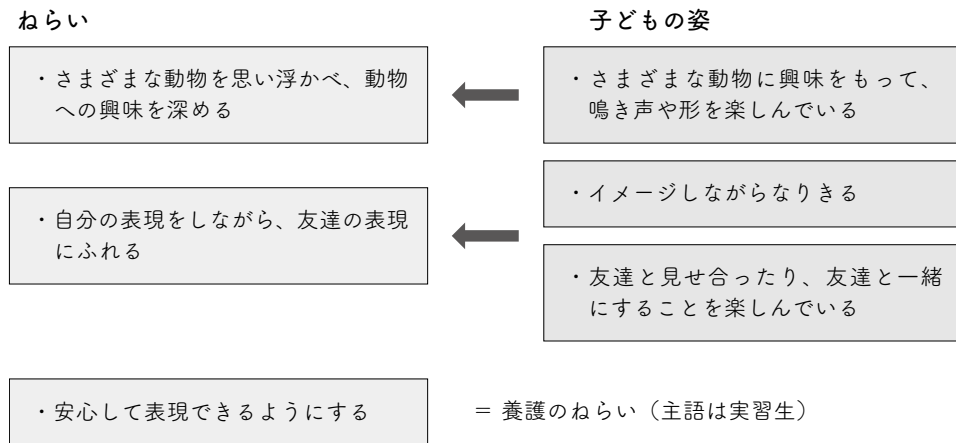
→見通しをもって、子どもたちで声をかけ合って物事を進める様子が見られる。

2.3 ねらい

2.2で捉えた子どもの姿を踏まえて、子どもにどんな体験をしてほしいか考えます。実習では、2.2で捉えた子どもの姿から数日先に体験してほしいことですから、「今体験していること（楽しんでいること）を、充分楽しめたらいいな」とか、「少しだけ別のものも取り入れてみると楽しいかもしれない」といった、今体験していることの積み重ねと考えるとよいでしょう（皆さんも、楽しんでいることが数日で大幅に変わったりはしませんよね）。

また、子どもが安定した情緒のもとで意欲をもって活動できるためのねらい（養護のねらい）も考えられるとよりよいでしょう。保育は常に養護と教育が一体となって行われるものです。

子どもの姿とねらいとの関係及び養護と教育のねらいについて、指導案例（p.138の指導案例）を見て確認してみましょう。



10

2.4 主な内容

活動名ではなく、子どもが体験する内容を書きます。例えば、「鬼ごっこ」ではなく「鬼ごっこをして友達と一緒に体を動かす」などです。

実習生が何か活動を提案する場合には、どのような活動を通してどのような体験をすることが、2.3で考えた「ねらい」につながるかを考えましょう。朝の集まりなど、ある程度決まった活動であれば、子どもたちがその活動を通して体験するであろうことを書きます（例：「一日の予定を聞き、自分なりに思い浮かべる」「担任の問いかけに答えたり、答える友達を見たりする」など）。特に繰り返される活動については、「ねらい」が日々の子どもの姿に基づいて立案されていれば、おのずと「ねらい」と「内容」が関連するはずで

20

2.5 予想される子どもの姿

実習日誌を基に、「この子たち」の姿を予想して書きます。「ぬいぐるみを遊びに取り入れて楽しんでいる子どもたち（p.137）が、実習生のパペットを見たら、こんな反応をするのではないか（p.138）」とか、「朝の状態によって支度がゆっくりな子どももいる（p.137）ので、新しい提案に戸惑うこともあるかもしれない（p.138）」などのようにです。また、日頃は見られないけれど、もしかしたらこんな行動をするかもしれないという姿も予想しておくとい

30

2.6 実習生の援助・配慮

実習生の行動や、子どもの姿に対しての援助・配慮を具体的に書きます。例えば、指導事例の下線④「パペットを使いながら「一緒にいろいろな動物になってみよう」と伝え、活動に期待がもてるようにする」という援助の記述が、「動物になりきることに期待がもてるように伝える」と書かれているだけであれば、シミュレーション不足で、実際に子どもたちに提案するときに戸惑ってしまうでしょう。子どもたちに説明をする際にパペットを用いることや、どのように伝えるかを考えておくことで、自然な活動の展開が可能となります。ただし、セリフをあまり細かく決めてそれにとらわれてしまうと、臨機応変に子どもに対応できなくなってしまうので注意しましょう。

10

また、「ねらい」によって関わりの案は異なるはずで

指導事例では動物になりきる子どもに対して「子どもと共になりきり、子どもの鳴き声や動きをまねしたりする」（下線⑤）とありますが、実習生がまねてみることで、子ども自身の表現を認めたり他の子どもの動きに関心を向けるという、ねらいにつながる援助になるでしょう。「動物の図鑑などで見てみよう」と伝える」（下線⑥）ことは、ねらいにある「さまざまな動物への興味を深める」ひとつの助けになりそうです。

2.7 環境構成及び留意点

環境構成や準備、留意点、ルールのある活動などの場合にはルールもこの欄に書いておくとい

環境構成も、実習日誌から、「朝の会の配置は…」「昼食前の集まりの場合は…」「午睡前の読み聞かせの場合は…」などと、場面ごとに把握します。これらを考慮して、計画する活動に応じて工夫します。

20

また、集まる時に子どもたちは椅子に座るのか、実習生は立つのか、どの椅子に座るのか、パネルシアターやペープサートなどはどこに置こうか、製作をする場合には道具をどこに置いたら子どもが使いやすいだろうかなどとしっかりと想像してシミュレーションをしていきましょう。すると、手拭きを用意しておく必要があるとか、次の行動の前に椅子を移動したほうがよさそうだななどと子どもの動きに合わせて必要なことに気づきます。

30

2.8 準備するもの

事前に準備しておくものを整理します。絵本や音源はタイトルまで確認し、道具の数や種類などを明確にして準備しましょう。

2.9 実践と振り返り

実践してみると、改善点やよかったこと、予想もしなかったことなど、さまざまな気づきがあるでしょう。これらを振り返って記述していきます。このとき、以下のことに留意してください。

- どうしたらスムーズにやってくれたか、という視点になっていないか
→ どうしたら楽しめたか、そもそも関心に合っていたかを考える。
- 計画どおりにできたからうまくいった、という捉え方をしていないか
→ 楽しんでいたか、何が意欲や楽しさにつながったのかを考える。
- 10 ▶ • できなかったことばかりの反省になっていないか
→ 要因は何だったのか、どうすればよかったか、次の可能性を考える。

保育は、計画、実践、振り返り（評価）、改善…を繰り返していくものです。振り返りをしながら、次の日この子たちとどう関わろうかと考えたとき、皆さんは保育の循環に一歩踏み出したといえるでしょう。

▶ 要チェック ◀

指導案ができれば、以下のことを見直してみましょう。

「思い通りになる」子どもの姿を求めていますか？

20 ▶ 集まるよう伝えると素直に皆集まる、やりたくない子にはカウントダウンをするなど…自分の思いどおりになることが当たり前の計画や、何とか参加させる方法になっていないでしょうか。子どもが意欲をもってやってみようとするのは、保育者（実習生）のことが好きだから、楽しそうだと思えるから、好きな友達が楽しそうにしているからです。そのため、「どうしたら参加するか」ではなく、「どうしたら関心をもてるか」「楽しそうだと思えるか」を考えましょう。